松江藩鉄師頭取田部家文書の概要

～田部家古文書調査から知りえたこと～

相良 英輔

相良でございます。私は山崎先生ほど鑪の専門家ではありません。ここ10年ほど絲原家、櫻井家、そして田部家の調査をしておりますが、山崎先生はずっと以前から鑪の研究をやっておられるので、私はいろいろと教えられながら調査をやってまいりました。今日は田部家の調査をやっている最中ですので、調査の中間報告をしてくれということでした。それは私の義務でもありますので、あまりはっきりしたことは言えませんが、田部家の調査の状況を皆さんに報告したいと思います。

田部家の調査については、島根大学の予算で1年間予備調査をやらせていただきました。その後、今日まで2年間を雲南市を事業主体とし、文化庁、島根県の補助・指導を得て調査をやらせていただいております。あと1年で報告書を出す予定でしたけれども、新しい史料も出てきましたので、1年延ばして、あと2年間やりたいということで、まだ議会を通過しておりませんが、雲南市長にはお願いをし、今その予算化をしてもらっているということでございます。4年間の長丁場ですので、私も何をやっているのかということの中間報告もしなければなりませんので、昨年、中間報告的なものを『松江藩鉄師頭取 田部家の研究』という本を出版しました。島根大学から出ささせていただいて、200部作りましたが、それほど多くの人々の目には触れていません。吉田町の関係の方とか島根大学、島根県立図書館、県の文化財課、教育委員会など、主なところには置いてあります。今日はこの中で触れたことにも言及し、田部家の史料がどういうものであるかということをお知らせしたいと思います。

今回、田部家の調査をやるということが皆さんに伝わりますと、「それはえらいことだ」となりました。田部家は最も中心的に製鉄業をやってきたところですし、広島佐々木家と同時に、全国的にもよく知られているところです。史料は全体的には公開されていませんが、主な史料は多少コピーでも出回っていて、中央でも優れた学者が研究しているということもありますので、一体どんなところまで研究が進んでいるのかということは、私たちにとって非常に気になることでもあります。この報告書の「はじめに」というところできっと説明して、どんな研究がなされて、どこまでがわかっている、そしてこれからどんなことがわかりそうかということを簡単にご報告させていただきました。

今回の調査は目録作成のための調査です。文化庁が補助金を出して全国的にやっている調査の一端で、全国の主な旧家の文書の目録をいろんなところで作っています。目録調査ですが、ただ単にこんな文書があるということだけでは研究をしている者としては物足り

ないといえますか、その中身を分析できないと元気が出ませんので、目録調査をしながら写真を撮って研究も進めていきたいということでございます。

今までの調査で、すでに2万2千点の史料を整理し、目録だけで800ページくらいになります。ですから、雲南市には2冊分の予算を取ってほしいと言いましたが、実に膨大な史料が蔵の中にぎっしり詰まっているということです。その中には、われわれのように、鑪に興味のある者には大変魅力的な史料がたくさんあります。目録を取らなければいけません、中身を早く分析したいという気持ちもあります。しかし中身の分析は後にして、目録を取るのが本来の仕事ということでございます。

文書蔵には古文書がぎっしり所蔵されているわけですが、それを見ますと、田部家がそういう文書を非常に大事に200年から300年近く保存してきたということがひしひしと伝わってきます。あの膨大な文書蔵の中はほとんどが鑪史料です。それは当たり前だと思われるかもしれませんが、田部家は2万5千町歩の山を持っていて、これは全国一です。2万5千町歩の山を持っていましたが、それと同時に300町歩を超える田畑がありました。小作人が昭和10年代の帳簿でも1,020人と書いてあります。小作人が1,020人いるわけですから。また、先の山崎先生の御講演にありましたように、広島に加計家（佐々木家）もかなり馬を所有していましたが、田部家も300頭の馬を所有しています。鑪の史料以外にも田畑の史料がもっとたくさんなければいけません。1,000人以上の小作人がいたら、帳簿がなければ整理がつかえません。帳簿がなければ頭の中には入らないです。ですから帳簿は必ず作ってあったはずですから。これがどういうことになったかというのがちょっとわからないというところがあります。今日は田部家の支配人もおいでになっていますので、そのことを頭に入れておいていただきたいと思います。

今までも、鑪の史料がぎっしりあることはわかっていたわけですが、公開はされていませんでした。しかし主な文書には表紙に付箋がしてあって、大正15年12月に、林政沿革調査資料として、農林省の山林局がすでに主な史料を借りているんです。大正15年に借りて、昭和3年6月に返していると表紙にはってあります。農林省が2年以上、主な史料を借りていたということがあるんです。田部家自身も、昭和11年10月に目録調査をしております、主なものは目録が作ってあります。しかし、今回は20人くらいのスタッフで調査していますけれども、今回は蔵の中にあるすべての文書を調べてよろしいとお許しが出ています。これはわれわれにとって非常に嬉しいことです。すべてを悉皆調査として調査するということです。今までの農林省の調査、田部家自身がやられた調査はすべてではありません。特に一紙文書はそんなに詳しく調べることはなさっていません。私たちはむしろ一紙文書の中に面白いものがたくさんあるということで、それもとにかく開いて何が書いてあるか把握するというので調査しておりますので、そういう点では今までと違うと思っております。

そういう史料を調査し、研究に結び付けなければいけませんけれども、私たちは、今まで何がわかっていて、これから何がわかるかということが大事であって、今までの研究に

についても把握しておかなければなりません。今われわれが調べてこれが面白いと言っても、既に調査してあったということでは格好が付きません。そこで田部家の研究史というものをきちっとおさえなければいけません。

早い時期の田部家の研究では、大正10年から昭和5年にかけての『島根県史』全9巻があります。これは復刻されて全8巻になっています。それにも田部家の史料が使っています。それによりますと、寛政10年(1798)に大坂の御用達、天王寺屋や鴻池屋などから、松江藩の鉄師たちが銀1,100貫目を借り入れるに際して、藩の仲介を得て、その結果仁多、飯石、大原3郡のたたら製鉄業は御主法入となり、家督をことごとく藩に提出し、この時より鉄山は「御鉄山」となります。その代わり鉄師は鉄山業を辞めるのではなくて藩の鉄山元支配という役職に就いて今までどおりたたら製鉄業をやっております。そして家督は藩が取りあげるという形をとっています。田部家にとっても、家督を全部藩に召し上げられるわけですから大事件です。そういうことが簡単に述べてありますが、これは『島根県史』を編纂している時、関連史料をすべて見たわけではなくて、ごく一部をみて書いた感じですが、非常に重要なものです。つまり、田部家にとって300年の間、家業を続けるということは大変なことでしょうけれども、やはり家運の良かったり悪かったりは当然ありました。経営の危機も当然あったにも関わらず続いているというところが、やはり偉大です。300年の歴史を続ける努力があつてはじめてなったことだということのわかる史料です。戦前の『島根県史』にはそういう記述があります。

研究史の2番目に紹介したいのは、小野武夫さんの『出雲名族の研究』です。これも有名なものですが、これは非常に詳しい100ページを超える大論文ですが、これは田部家と櫻井家と絲原家を三名族として記してあります。島根県の三大旧家と言われる所以ですが、それを詳しく書いたものであります。これにも弘化4年(1847)年に田部家は再び御主法入しましたが、そのことに詳しく言及しています。寛政10年に田部家は財産を全部藩に召し上げられたということがあり、弘化4年にもまた財産を召し上げられるということがありながら、再びたたら製鉄業を再建していくということになります。こういうことがわかってこそ300年の歴史の値打ちというのがわかるのではないかと思います。

研究史の3番目は、堀江保蔵さんの「松江藩の製鉄業政策」です。これは昭和6年の『経済史研究』に書いてあるものです。今ここで挙げた小野さんにしろ堀江さんにしろ、後で出てくる高橋幸八郎、山田盛太郎という錚々たる日本歴史の研究者、トップクラスの方ですが、そういう方々が田部家の研究をやっておられるわけですね。堀江さんのそれも寛政10年の御主法入、弘化4年の御主法入に言及されています。

4番目は平井泰太郎さんの「出雲帳合の性質」という論文です。昭和11年の発表になりますが、『国民経済雑誌』に載っているものですが、これは田部家の帳簿がいかに優れた帳簿であるかということを経済史の視点から述べてあります。それぞれのたたら場、大鍛冶場を独立させて、独立会計で事業本部的な感じですが、それぞれが独立した鑪場、大鍛冶場に行っていることを明らかにしています。それぞれの事業所に責任を持たせていた

ということで、その帳簿を非常に高く評価しているというものであります。

5番目の高橋幸八郎さんの「島根県における株小作制度と田部家（鉄師）の構成並びに農地改革の影響」、これは農地改革で田部家の田畑がすべて解放されますから、田部家の農地改革がどのようになるかということも視点に入れながら、田部家の組織の全貌を調べているわけですが、田部家の史料に基づいたわけではございません。

研究史の6番目の山田盛太郎『日本農業生産力構造』（1960年）ですが、この山田さんは高橋幸八郎さんと共に東京大学の先生でしたが、日本史の大家です。大学者ですが、そういう人が10ページくらいにわたって田部家の史料を分析しています。これは重要なものだけを見ておられますが、この時は田部家がかかなり協力をしておられるような形跡があります。分析そのものは非常に優れたものということでもあります。

それから『新修島根県史』、これは昭和40年のものですが、これには『史料篇』にも田部家文書がたくさん収められています。ただし通史はそれほど詳しくありません。

そのほか武井博明さんの『近世製鉄史論』があります。武井先生は鉄山業の生産、流通、労働に関して全国的な視野で優れた分析をされています。われわれも影響を受けている本でございます。

最近では渡辺ともみさんが『たたら製鉄の近代史』を出版しています。『新修島根県史』の『史料篇』を利用して田部家に言及しています。

野原建一さんも『たたら製鉄史の研究』で『新修島根県史』の『史料篇』などを使っておられます。

最後に私の編著『松江藩鉄師頭取 田部家の研究』をあげておきます。先にも申し述べましたように、島根大学から出したものです。今日はこれを紹介しながらご説明申し上げたいと思います。今まで使われてこなかった偉い先生方の本にもあまり出てこなかったようなものも使って田部家を編年的にたどってみました。私の関心から山内の実態がわかるようなものを少しずつ分析してみたということでございます。

今紹介しましたが、田部家のたたら製鉄業や田畑の研究に関しては、すでに随分と戦前から研究されています。しかし主なものは扱われていますが、抜けているものもたくさんあると思います。田部家から蔵の中の史料を全部見てよいと言われましたので、それを現在8割方目録にとりましたが、その中には、今までの研究で明らかになっていないものもたくさんあるということで、目録調査が済んだら、私などはもう年なので、隠居仕事というようにいい加減にはいけません、これを分析するのを今後楽しみにしています。

田部家の史料については、一番古いものは戦国時代からあります。今史料がちょっと行方不明になっています。これが現在どこにあるものかと思っていますが、その戦国時代の史料を、専門家がそのまま戦国時代の書き方のおりに写した、影写史料といいますけれども、これが島根県立図書館にあります。尼子氏の研究をやっておられる長谷川博史先生という島根大学の中世の専門家に見せましたら、本物と変わらないというくらいの影写史料です。いつのものかという、永禄3～6年（1561～1564）のものなんです。それは田

部家の4代目、田部惣左衛門通政が毛利方に組みし、出雲の来島において軍功があつて、国人山内周藤氏からいただいた「感状」という「書状」4点であります。田部家はもともとどこで活躍していたかということを通る公的な史料、いろいろな沿革はもっと古い鎌倉時代からあるわけですけれども、公的な史料として出てくるものとしては一番古いものです。それは広島県の庄原市の^{しとみやま}蔀山にお城をもっていた山内周藤という国人の関連史料です。山内周藤の庶家の多賀山氏の家臣として田部氏がいるということが、その一連の史料でわかります。

その多賀山氏は備後の国で活躍していますから、こちらの島根の国境でも当然勢力を持っていました。そして現在の県道38号から国道54号線に出たところの突き当たりの日倉橋のところに、日倉城という戦国時代のお城跡があります。そこを根城としておそらく田部氏は活躍していたんだろーと思います。その結果、掛合郷坂本村の土地をもらっています。ですから田部家はもともとは掛合の坂本あたり一帯をもらって、その地域が田部家の活躍の場であつたと推測されます。備後蔀山城の出城であつた日倉城が田部家活躍の中心になっていたんじゃないかということがわかる史料です。

それでは、次に今回の調査で新しくわかつた点をいくつか紹介します。まず、第一に、江戸時代初期の史料です。寛文13年(1673)、「永代売渡申鑪山鍛冶屋山之事」という史料です。江戸初期の田部家が鑪をやっていたことを示す史料として非常に貴重なものです。吉田町の庄屋の利兵衛と助八が鉄山や鑪の道具を綿屋五右衛門に売っているということです。「鉦山、鍛冶屋山之分、少も不残、并ニ鉦道具、かち屋道具共に永代売渡」とあつて、銀4貫950目で田部家が鉦道具と鍛冶屋道具を買っていることを示す史料です。江戸初期の田部家の鑪関係の活動を知ることのできる比較的古い史料です。こういうものが出てくると、誰もまだ見ていない史料ですから、しめしめということであれわれは喜ぶということですが、新しく田部家の歴史を明らかにできると思います。こういうことがないと元気が出ないわけですね。田部家にも3年くらい毎月のように行かせてもらっていますが、その度に田部家には大変迷惑をかけております。それでもわれわれは歴史家として誰も知らない史料、まだ明らかになっていない史料をみつけますと、また元気が出るということでございます。

第二は、銑生産から割鉄生産への変化です。かつて私は、松江藩においては、文化年中(1804年~1817年)銑生産から割鉄生産に徐々に変わっていくということを、論文に書いたことがあります。先ほど山崎先生が、広島では江戸初期から割鉄生産で鍛冶屋がいっぱいあるということをおっしゃっていましたが、島根の場合は、割鉄生産が中心ではなくて、銑の生産が中心で、銑をそのまま売っています。しかし江戸時代後半になって、割鉄の方が付加価値があるから、不景気なこの時代になるべく高く売れるようなものを作った方がよいということで、割鉄生産にしていって、幕末にはほとんど割鉄です。田部家が確固とした地位を築いていった大きな原因の一つに、いち早く割鉄生産に持っていったことがあると思います。割鉄生産に最初にもっていった鉄師だということで注目すべきではないか

と思っています。

実は昨日、近代だたらの操業をやっている最中に、鉄の歴史博物館に史料を見に行きました。寛政 11 年（1799）に割鉄生産の方がいいんじゃないかと書いてある史料が出てきて、割鉄生産になっていく時期を少し早い時期に訂正しなければなりません。松江藩は享保 11 年（1726）以降、10ヶ所の鑪と3軒半の鍛冶屋を認めてきました。「半」というのは一体どういうことか。1軒に火床が2ヶ所あり、半軒というのはそれが1ヶ所だけということです。実質4軒です。鍛冶屋を3軒半しか認めていないということは、製品化した割鉄は出さずに主に銑のまま売っており、それが藩の政策だということです。その後藩の方も割鉄がいいんじゃないかということを書いて、それを田部家は積極的に受け入れたというふうに思っています。鍛冶屋の増加をどんどん藩が認めることによって田部家は鑪場を幕末には3ヶ所、鍛冶屋を5ヶ所、広瀬藩には鑪場を3ヶ所、鍛冶屋を2ヶ所作っています。最初は鑪場を松江藩全体で10ヶ所しか認めていなくて、最後には2～3ヶ所増えています。鑪場はそんなに増やさないんです。広瀬藩は3万石の領地のうち、1万5千石は頓原と赤来にあります。現在の広瀬の地域（現、安来市）が1万5千石です。その飯石郡の広瀬藩は松江藩の鑪場10ヶ所の範囲外ですから、鑪場を増やせるということで田部家は広瀬藩にどんどん進出します。これらの関連史料から田部家のたたら経営、大鍛冶場の経営が全体的に見渡せるようになり、これも新しいことではないかと思えます。

第三に山内の実態がはっきりとしてきたことも調査の成果です。山内というのは鑪場あるいは大鍛冶場に加えて、山内の労働者、あるいは元小屋とか炭小屋とか鉄蔵とか、そういうのが全部一式揃った地域です。山内労働者もそこに家を持って一つの地域を作るわけです。鑪場を中心にして労働者もその周辺に住んでおり、山内の規模とか労働者の数がはっきりわかるようになり、その変遷というものも少しずつわかってきました。これは今まではっきりわからなかったことかと思えます。

特に、幕末の慶応2年（1866）年ですが、『他国者取調書出帳』という史料があります。よその藩からどういう人が来ているか、よその藩から労働者が何人来ているかということ調べたものであります。たとえば田部家は何人くらいよその藩から入れているかという、石見の国では邑南町の矢上などからも来ていて、全体で29人来ています。備後（庄原市）からも何人か来ています。家族の人数も名前も年齢も書いてあるんですけども、そういうことが比較的よくわかります。最近では11ヶ所の山内絵図も出てきて、山内をはっきりイメージすることができます。

明治40年の山内地図なんですけれども、江戸時代の山内の実態とほぼ変わらないと思います。それぞれの山内絵図には労働者の家とかたたら場とか炭小屋とか鉄蔵とか全部書いてあります。面積も書いてあります。

その一つ、八重滝鑪の山内絵図をお示しします。八重滝は国道54号線を南に下っていくと、入間というところがあります。左に「八重滝」と看板が出ていますが、八重滝鑪は広瀬藩領ですが、その山内絵図です。

鑪場の高殿、草ぶきの屋根だと思うんですが、労働者の家もあります。このような合計 11ヶ所の絵図が出てきました。実は絵図そのものはそんなに鮮明ではないんですが、雲南市教育委員会（埋蔵文化財事務所）の青木さんに依頼し、これをパソコン上で色をはっきり見やすく復元しました。位置とか大きさはそのままです。

吉田町鍛冶屋は 250 名くらいの方が住んでいます。第 1 表です。「吉田町鍛冶屋山内人口の変遷」という表ですが、この一番下を見ますと、天保 11 年に 250 名ですから、山内に 250 人はいたということです。これはちょっと大きいかなと思うんですけども、こういうふうに山内の家族を入れた人数が 250 名です。一軒ごとでいけば、第 2 表ですが、菅谷鉦が 29 軒、杉戸鉦が 32 軒、そういうのを全部入れると 5ヶ所の鑪場で 139 軒ということになります。これに櫻井家と共同経営した八代谷鑪が 25 軒あるんですが、田部家分を半分の 13 軒として合わせると 152 軒くらいは田部家の山内労働者の家ということになります。これに大鍛冶場が 8ヶ所ありますから、1ヶ所あたり山内労働者の家を少なめにみて 25 軒としても、それだけで 200 軒、合わせると 352 軒、1軒あたり 4人住んでいるとすると 1,408

第 1 表 吉田町鍛冶屋山内人口の変遷
(単位：人)

	男	女	計
文政 9	127	93	220
10	130	95	225
11	133	99	232
12	134	104	238
13	142	111	253
天保 4	145	111	256
5	147	119	266
7	152	128	280
8	154	128	282
9	138	117	255

第2表 明治2年

田部家各鉦の山内労働者竈数（戸数）

村名	鉦名	竈数
吉田村	菅谷鉦	29 軒
吉田村	杉戸鉦	32 軒
松笠村	中谷鉦	23 軒
入間村	八重滝鉦	32 軒
志津見村	弓谷鉦	23 軒

（注）田部家は、この時期櫻井家と共同経営していた

八代谷鉦がある。その竈数は25軒である。

出典 田部家前蔵文書

人になるわけです。1,408人が生活するわけですから、米も相当いるということです。私は田部家は田地もたくさん持っていましたから、自分の田地の小作料だけでも養えると思っていました。しかし足りないですね。先ほども山崎先生が講演で話されましたが、藩の養い米というのは、藩から年貢をそのまま借り入れて、後で代金を払うというものですが、つまり田部家の山内労働者の家族を含めた食糧は小作料だけでは足りず、藩から養い米を借りて養うというようなことになるわけです。

レジュメの最後につけているもう1枚の絵図は、芦谷鍛次屋の絵図です。八重滝鑪の絵図と同じように元の絵図をわかりやすく復元したものです。これはてっきり芦谷峽の「やまめの里」のところかと思って行ったんですけども、どうも違うようです。というのは、今の芦谷の集会所のある所の向い側に金屋子神社があります。といっても名前は「山内三社」と地図には名前があります。金屋子神社ではないのかと思ったら、田部家の内藤支配人に聞いてもらったのですが、三つの社が合わさっているということでした。つまり、「やまめの里」の所が大鍛冶場ではなくて、今の集会所のあたりが芦谷鍛次屋山内だということです。今は金屋子神社だけがその当時をうかがわせるだけで、あそこにはもう何もないわけですけども、絵図上には、鑪場と本屋などが書いてありますが、倉庫や鉄小屋、炭小屋などもずらっと並んでいました。こういうことがはっきり絵図にできましたので、一般の人にもわかりやすい絵図ができたと思っております。これは非常に貴重な絵図ではないかと思っております。

そのほか、たくさんの方がわかるんですが、最後に田部家のたたら経営は、どのような終息を迎えたか述べておきます。田部家は明治40年にたたら経営の規模を縮小し、菅谷鉦、大吉鉦、芦谷大鍛冶場、杉谷大鍛冶場の4ヶ所を残します。そして大正4年には鉦、大鍛冶場ともに半減し、労働者も半分以上は辞めてもらいます。大正10年にたたら場をさらに半減して木炭業に移り、大正12年にすべてのたたら関係カ所を廃業にして木炭業に専

念することになります。こういうことは今まであまり書かれてないですけども、わかっていたと言えればわかっていたということですが、一般の人にはあまり知られてないと思います。

先ほどの「他国者取調書出帳」では、田部家以外のことも詳しくわかります。これらは飯石郡、仁多郡、大原郡全体の鑪経営者がどこから労働者を呼んだか、松江藩以外からどれほどの人を呼んだかということもわかります。そうすると、先ほど29名が鑪関係ではよその藩から来たと申しあげましたけれども、仁多郡ではおそらく櫻井家が中心だと思いますが、78名が他国者です。櫻井家は峠を一つ越えたらすぐ備後の国です。備後の高野町に明治期櫻井家は30町歩の田地を持っています。今も高野町の本誓寺に櫻井家のお墓もあります。ですから櫻井家は高野町に非常に縁が深いんです。封建時代も、石見と安芸は自由に行き来しています。櫻井家も藩域を越えたら備後の国だといっても、お互い交流し、結婚もするし、労働者も行き来していたことがよくわかります。今までの研究でわからなかったことがたくさんわかるようになって、それをきちんとした本にしてお役に立てなければならぬと思っております。

短い時間ではあまり紹介できませんが、新しいことがわかってきつつあるということです。今後調査したものの成果は10年経っても紹介しきれないくらいあると思います。それを少しずつですけども研究成果にしていかなければいけないと思っております。最後にそのことを皆さんにお伝えして本日のお話を終わらせていただきたいと思っております。

ありがとうございました。

(本稿は2009年11月、鉄の歴史村フォーラム2009での講演記録である。)